武蔵野市第四期長期計画調整計画策定委員会（第７回）会議要録

■　日　時　平成19年７月９日（月曜日）　午後７時から午後９時34分まで
■　場　所　市役所８階811会議室
■　出席者　田村委員長、酒井副委員長、山本副委員長、加瀬委員、栗田委員、栗原委員、小原委員、前川委員、向井委員、村井委員、会田委員
企画政策室長、企画調整課長、企画調整課副参事（行政経営・評価担当）、企画調整課副参事（新公共施設開設準備担当）ほか、傍聴者15名

１　開　会
２　議　事
（１）議事録の確認
【事務局】要録については事前に確認いただき、訂正したものを配布した。本日確認いただいて、ホームページで掲載したい。全文録については、訂正等を次回までに連絡いただきたい。

（２）討議要綱について
【委員長】予定としては、討議要綱は今月いっぱいから来月半ばぐらいまでに仕上げていく。市民会議の提言、策定委員の考え、前回の計画、行政側の考えを複合的によじり合わせ、取捨選択しながら、討議要綱を作っていく。
今回、子ども・教育分野で作成したものは、討議要綱の原案である。今後、出来る限り豊かな議論を行い、それをベースにまとめていきたい。
原案の説明をとりまとめた委員から説明願いたい。

【委員】市民会議提言書の重要課題や長期計画策定後に行われた様々な法律改正に伴う市の新規事業計画等を織り交ぜながらたたき台を作成した。
子育て施策の総合的推進については、子育て家庭にとって「支えられ感」の感じられる施策であることを、理念のようなものとして掲げた。「子どものニーズ」という表現は、誤解を避けるために正確な言葉に言い直す。どんな親子も受け入れられているという実感のもてる「居場所」をつくる。保育園待機児童を解消する１つの方策として、認証保育所の誘致を挙げた。公私立幼稚園、保育園等提供されるサービスに応じて親の負担に格差のない仕組みについても検討が必要と考える。
親子のふれあいと家庭への啓発の項目では、親として育つ機会を充実させることを挙げている。
境幼稚園の新しい子育て支援施設については、討議要綱で広く問いかけるという記述とした。

学校教育の充実については、理念や方向性となるものを３つ挙げた。セカンドスクール、旧桜堤小学校の利用方法については討議要綱で問いかけたい。義務教育改革にかかる具体的な施策について、どのような形で反映させられるか議論が必要である。学校緑化については、教育活動の妨げにならない範囲で推進する。心の発達を促す教育や環境教育のさらなる推進、中学校給食の実施、学校改築計画に基づく学校改築の他、今日的課題への取組を挙げた。

青少年施策の充実についても、青少年が心身共に健全で豊かに成長していくための施策という理念を掲げている。土曜学校の内容の検証と充実、学童保育の環境整備等を挙げている。国際交流事業については、青少年にとって有益となるような充実の方策について、討議要綱で問いかける、とした。

生涯学習施策の充実についてはその方向性を掲げ､総合計画の策定を挙げている。市民会館のあり方については、利用者を含めて、討議要綱で問いかけてみたい。歴史資料館についても、館としてつくるべきか、イベント的に実施するのが良いかを含め、討議要綱で問いかけてみたい。武蔵野プレイスの開館後に検討を要する課題についても挙げておいた。

【委員長】議論の前提として、今回の討議要綱は、議論を広げる、あるいは議論を深めることを目的とした、問いかけ方式と考えている。

【事務局】前回委員会で委員長が提案した討議要綱の構成を念頭においたうえで、今後の議論としては、１つは討議要綱での問いかけの仕方について、２つ目は理念として提言されたものをどのような形で盛り込むか、３つ目は討議すべき事項について漏れがないかどうかという視点を踏まえてお願いしたい。

【委員】この資料だけ見ると、どの部分が作業部会における議論のポイントとなったのかが見えてこない。市民会議の提言と行政の考えとが、作業部会の議論だけで全部合致したわけではないだろうし、どの点がこれからの議論に任せようという部分なのかが見えてこない。

【委員】この資料は、担当委員が作られたたたき台をもとに、作業部会でワーキングチームの職員と意見交換を繰り返して出来あがったものである。十分に議論を尽くした結果である。

【委員長】分野によって議論の仕方は異なってくるだろう。

【委員】大筋の流れは分かっているが､非常にすんなりいっているので言っている。わたしとしては、子どもが育っていく過程の中で、地域で各々がどういう機能で関わるかという視点を、今後もう少し掘り下げていけば、健康・福祉分野で提起されている地域のつくり方にも繋がっていくと感じている。

【委員長】作業部会で大きな問題となったのは、コミュニティをどう見直すかということ。もう一つはばらばらの施策等を動かしていくときに職員の地域担当制のようなものを重層的に考えていけないかということ。このあたりの話は、今回の計画

のベースになる話と考えている。ただ、全部の領域に関わる１つの考え方であり、調整計画の基本的姿勢のようなところでまとめようと考えていた。
【委員】『子どもと教師、学校と家庭、学校と地域社会の信頼関係を改めて構築する』と書いてあるが、もう少し具体的に、議論するべき内容の見える表現に書き改めてはどうだろうか。
【委員】市民会議の提言と比べると、トーンがかなり落ちているのではないか。学校を開くということは、１つのキーワードになると感じている。学校や先生方に求めるだけではなく、人的資材なりコミュニティの協力なりを示さないと、ますますいろんな仕事が押し付けられるという感じがある。
【委員】地域の人が学校を支えるというのは、それ自身は美しくていいことだが、実際そういうことを言うときに、どういうことを頭に入れておかなきゃいけないのかということについて、教育委員会の側の考えはどうか。
　学校の視点からでいいから、様々な経験や能力を持った住民の方々を、どうやって利用していくかということや、学校の自主性で子ども、というか教育を守らなきゃいけない部分が､討議要綱を介した市民の方々との議論の中から出てくると良い。
【委員長】学校の話については、既に実施されていることはたくさんあるが、我々としては全然違う意図を持っているわけで、これを議論して欲しいという言い方をはっきりした方が良いかもしれない。
【事務局】今後、教育委員との懇談等もあるので、学校の実態や必要な援助についてヒアリングを行っていただきたい。
【委員】コーディネーターとして、行政が入ると上手くいかない。年に数回ある位の協議会ではなく、普段着で自由に大人たちが入って、あまり教育くさくない活動でないと役に立たない。
【委員】やはり学校の先生や行政の職員ではなく、コミュニティコーディネーターとしての専門職が必要だろう。そういう能力のある方が間に入って、学校と地域をつないでいき、開いていくという形がいいのではないか。
【委員長】今までの武蔵野市は、色々な制度が揃っているようだけれど、何かうっ血状態というか窒息状態のところがある。これからはどう動かしていくかという創造性が求められていて、地域の力とか多主体協働とか、パートナーシップとかに力を入れていくと、明確に書いていく必要があるだろう。
【委員】その話は『あそべえ』をつくる時にもし、他区市の事例も調査し、そういうことを配慮した。まだそういう意見が出るということは不十分だということ。
【委員】地域間格差はあるが、子どものつなぎとなる子どもを育てること、そういう子どもを引っ張ってくるソフトが欠如している。
　ミニタウンというイベントは、子どもから育てようということで始めたイベントであり、芽はいくつもあるので、情報をもっと広めていくことが必要だ。
【委員】全市的に、そのような経験の共有、お互いに刺激をあたえるようなコミュ

ニケーションがなされていると考えるか。
【委員】ミニタウンに関しては、今年が１回目だったので、コミュニティセンターという組織を通せば、広まっていくような素地はあると思うが、継続していくための支えがあると、全市的に広まっていくだろう。
【委員長】これらの意見を踏まえて、もう少し勢いを主張できないか。
【委員】市民の中の専門家が間に入って地域を開いていくことが大事というのはもっともだが、市の後押しなく入っていけるかが難しい。市の役割とは、ＮＰＯだったり､施設管理者だったり､やる気のある市民だったりするキーパーソンを把握し、次のキーパーソンを育てることではないか。
【委員】違う点について質問である。『支えられ感』の感じられる施策について、具体的なイメージがあれば、例示していただきたい。国際交流事業について、国際交流協会が行っている事業についてはどのような考えか。
【委員】『支えられ感』については、家庭においてだけでなく、地域社会において支えられているという感じが伝われば、子育て家庭は孤立しないのではないかということ。そのための様々な子育て支援施策を総合的に推進して欲しいということを願って書いた。
【委員長】国際交流の話は大切な話だと思うが､視点を変えていく時代とも言える。今後議論が必要であろう。
　長期計画では家族の存在が割合に重視されたように思うが、計画としては、もっと社会的なところで、どういうところに求めるかという意味で、『支えられ感』というのは良い言葉だと考える。前の計画より１歩前進したと感じている。
【委員】長期計画では、親子のきずなや家庭のきずなが大変強調されていて、そういうこともちろん大事だが、今や「サザエさん」は理想形の１つでしかない。
　子どもは家庭の中で育つことを前提に、地域、企業や行政を含む全体に共通の責任があるという認識を持って子育て支援を進めるべきということが、子ども・教育分野の大きな前文として書かれていれば良いと考える。
【委員】「サザエさん」の家庭が理想と言ってしまうと、それを実現できない家庭をどういうふうに支えることが出来るのかを考えるときに、ふさわしくないのではないか。
【委員】誤解を招いたようだが、それは一昔前のものであり、現実とは乖離しており、もはや理想ではないということである。
　最終的には、子どもに対して重い負担にならない、子どもが幸せになるような施策を実施していく必要がある。地域の福祉が機能していることで、子育て家庭が明日の生きる気力を得ていく。
【委員】今回の計画は、これまでの法制度がありきの計画から、市民のニーズ、市民が望んでいるものが軸になった事業に転換していくべきだということが明確にわかるものにしていかなくてはならない。『支えられ感』とか『子どものニーズ』とか、

もっと具体的に、明確に、誰にでも分かる言葉で書いていくことが必要だ。
【委員長】不登校やニートの問題についてはどうか。
【委員】学校が子どもの全部をケアできない、むしろ対峙してしまうような部分もある。今までは比較的、学校が面倒見るべきだという発想であった。もう少し広い範囲で、多元的な考え方みたいなものを形として、武蔵野市は先導して表に出していくことが必要ではないか。フリースクールみたいに拮抗するモデルがコミュニティの中にあるということが、子どもにとってはそれだけ選択肢が広く、逃げ場所があるわけで、こういうことが重要ではないか。
　日本社会も、だんだん寛容の部分が狭くなってきて、隅々まで目が行き届くようになった分だけ、若い人たちにとっては生き難くなっている。
【委員】生涯学習の分野でも、そういった問題を扱えないだろうか。武蔵野プレイスにそういう機能はないのか。
【委員】武蔵野プレイスの基本的な考え方は、場、「place」である。人がそこで動いて、出会いがあって、発見があって、そういうプレイスという意味。その中には、生涯学習という、自分を活かすための、今のあり方を実らせるための学びがある。
　青少年の場合にはとにかく余り教育くさくせず、ふらっと行ってみて、そこにいる人達をふらふら見ながらつながりをつくっていく、自分の関心のあるものを深めていくというようなことを提供していきたい。
【委員】それにはやはりコーディネーター、きちんとした専門家が必要である。仕組を作るのは行政の仕事で、それを利用するというか、そこに良い人材を集めるのは、市民がしていくべきことではないか。
【委員】行政に必要なのは、どこまでとことん付き合うかであり、むしろ本来は、そういう人材を市民の側で育てなければならない。
【委員】本当に支援を必要としている孤立している若者に対する援助と、武蔵野プレイスに寄ってみようと思えるような人に対するサービスは分けて考えた方が良い。前者は生涯教育ではないだろう。
　オーストラリアではケアマネージャーは失業者につく。長く失業して、自分で職を探す元気が無くなってしまった人には、社会教育ではなくて、もっと個別的な援助をしていく人が必要である。そういう人に出会えれば幸せだが、きちんとした仕組みを行政が整えることが大事だろう。
【委員】先程から、人とつながるための人づくりの話題が出ている。既存のシステムとして、民生委員の現状はどうなのか。
【委員】基本的には、地域でお困りの方を発見して、適切なサービスにつなげていく、そのつなぎの役割は持っている。しかし、そのような地域に密着した情報を民生委員だけに担ってもらうのには、かなり無理があると感じるので、地域のネットワークをどう組み立てていくかということに関わるのではないか。
【委員】民生委員が得た情報を市はどのように、具体的な支援策につなげているの

か。そのシステムがきちんと出来ていれば、民生委員の役割はもっと充分に果たされていくのではないか。
【委員】民生委員、児童委員はどんどん責任が重たくなってしまっている。青少年の問題を扱うには、技術的にも高いものが要求されるので、素人ではなく、きちんと訓練を受けたソーシャルワーカーが必要であろう。
【委員】理念として「すべての子どもの育ちと学びを保障する」ということを考えている。「すべての」ということは、不登校の子ども、ネグレクトされている子ども、様々な子どもたちということ。もう一つは、学校に行かない子どもの「学び」をどう保障するか。フリースクールだとか、ＮＰＯや市民活動を組み立てるだとか、行政と市民とが協働して子どもを育てていく責任がある。
　もう一つは、様々な施策が実施されているが、それが今どんな課題を抱えているのかは検証する必要があるだろう。例えば大野田小学校のオープンスクールやセカンドスクールについて、発達障害を抱えた子やそうでなくても苦しい事情を抱えた子にとって、どういうサポートが出来るのかを検証する必要があるのではないか。
【委員】ヒアリングでは、学校改築は単なる建築のリニューアルの改築計画だということであった。今の教育のあり方を考える器としてどういう学校がふさわしいのかというような、学校施設としての基本計画のようなものは必要ではないだろうか。その中には当然学校緑化のあり方も、冷房が必要かどうかも入ってくるだろう。
　もう１点は中学校給食についてで、長期計画からの大きな方向変更として捉えるのであれば、方針を変えたことを位置づけることが必要ではないか。
【委員長】それは明確にする必要があるだろう。
　担い手に関する話は、どちらかというと規制緩和や市民協働となりがちだが、公の復権みたいな話も、相当出てきている。武蔵野市は比較的豊かなので、いろいろな形で公というものが正面に出てきたと思うが、逆に公の復権、見直しについて考えはあるか。
【委員】公の復権というより、組換え、「ガバメントからガバナンス」ということだろう。官から民へという場合に想定されるマーケットにはのらない領域の公共サービスに対して、家庭や地域、ＮＰＯがどう参画していくかという問題意識を持つことである。
　それから、議論の原点として、教育基本法や教育三法の話は必要か。書くとすれば、つまみ食い的に扱うわけにもいかない。それとは関係なく、武蔵野市が語れる教育の担い手論を原点とすれば良いのではないか。
【委員】御指摘はもっともである。思想的なものを取り上げているのではなく、まさにつまみ食いではある。しかし、調整計画策定にあたっては、こういう流れがあることを共通認識とする必要があると考える。
【委員長】社会教育から生涯学習へ、生涯学習から都市文化へという大きな流れがあっても良いのではないか。教育施設として置かれている図書館や、美術館をもう

一度見直して、文化都市という意味で、都市の活性化につなげていく必要があるのではないか。

具体的に書いてあるものをもとに議論していくと、立体的に見えてくる。他の分野との関連や、市政全体の問題も見えてくる。非常に大変な方式ではあるが、続けてみたいと思う。

【委員】市民の意見をダイレクトに長期計画に入れていけるこのチャンスは今後ずっと無くしたくないので、市民のモチベーションと同時に、職員のモチベーションも上げていきたい。

昨日の作業部会で出された問題に食育の問題があるので、ここでふれておく。

【委員長】では、このような形式で、各分野の議論を行っていくものとする。後ほど事務局で日程調整をお願いする。